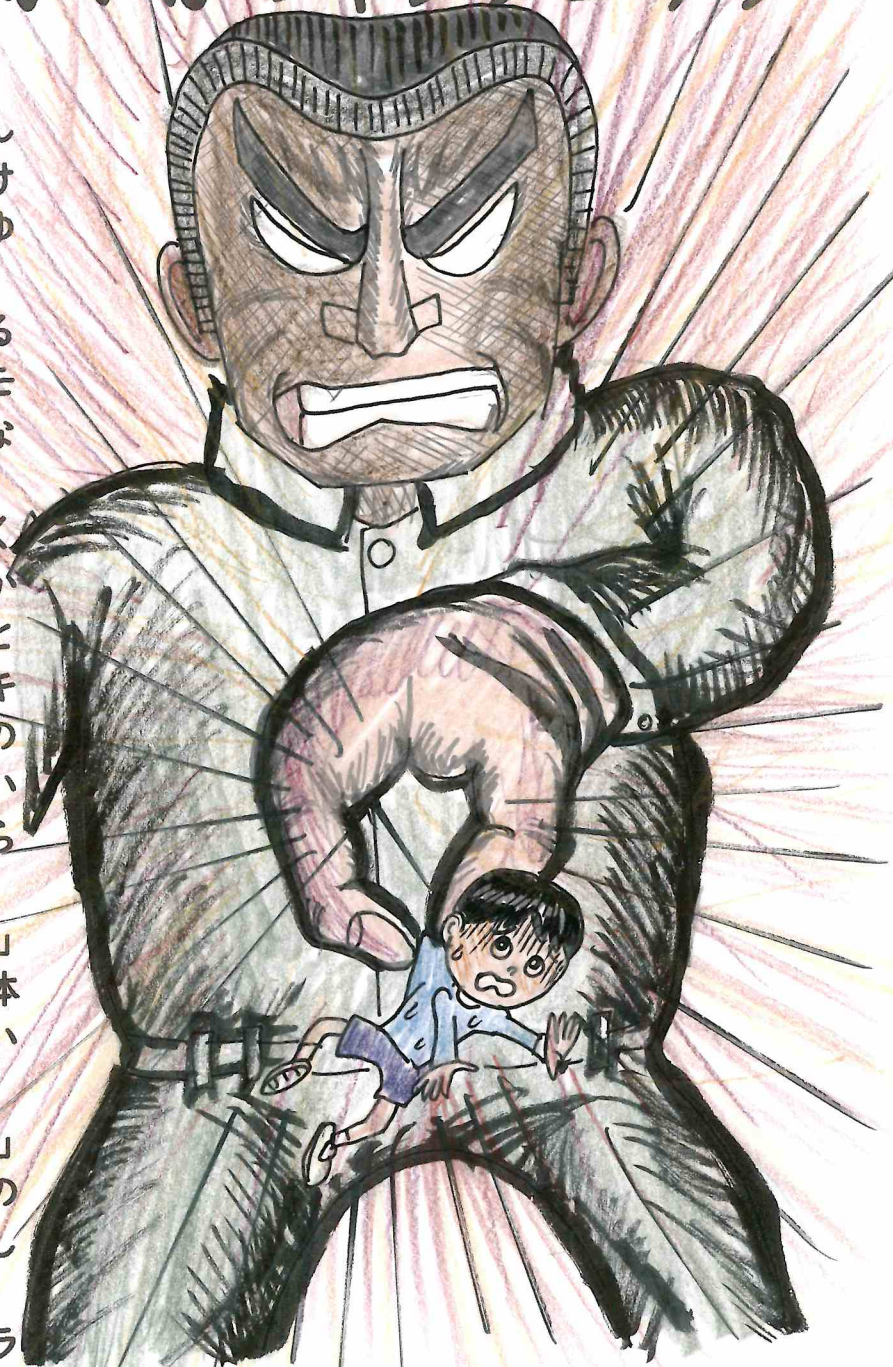


校長先生の初恋物語

第39話 かいぶつキングゴリラ

「ずしん、ずしん……。」
あらわれたのは、とっくんの
お父さんです。歩くだけで
家全体が地震のようにゆ
れてしまうくらいの大男。
体重は、100キロをかる
がるこえています。マンモ
ス町でも知らない人はいな
いくらいのかいぶつです。
とっくんの友達は、とっく
んのお父さんのことを「か
いぶつキングゴリラ。」と
よんでいます。かいぶつキ
ングゴリラは、とっくんの
わがままな声をきいて、い
かりをばくはつさせながら
やってきました。
「ずしん、ずしん、ずしん。」
とっくんは、きょうふで体
がカチンコチンになってい
ました。
「ずしん、ずしん、ずしん。」
とっくんの目の前に、その
かいぶつは立っていました。

かいぶつキングゴリラ
は、電柱のように太いうでをとっくんに向かって伸ばしてき
ました。そして、とっくんの首をギュッとつかむと、そのま
まとっくんをかんとんに持ち上げました。とっくんは、まる
でUFOキャッチャーでつかまったぬいぐるみのようでした。
足をばたつかせ、うでをふってにげようとしたのですが、かい



ぶつキングゴリラのたくましいいうでは、びくともしません。

「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい。」

あわててとっくんはあやまりますが、かいぶつキングゴリラ
は何も言いません。何も言わず、とっくんをつかんだまま、
歩き出しました。そして、部屋のまどのところまでくると、
まどをいきおいよくあけて、「ポイツ。」と、とっくんを外に
向かって投げすてました。自分の子どもだというのに、てか
げんはありません。とっくんは、空中で一回転しました。そ
のまま固い地面に、背中から落ちました。あまりにも痛くて
苦しむとっくんでしたが、かいぶつキングゴリラはまったく
心配してくれません。そのまま窓はぴしゃりと閉まりました。
とっくんはあわててげんかんに行きました。でも、げんかん
も、かぎをかけられてしまいました。とっくんは家に入れて
もらえませんでした。

かいぶつキングゴリラは、とっくんをゆるしませんでした。
夜の7時になっても、8時になっても、9時が過ぎても、1
0時になっても家の電気がすべて消えても、とっくんをゆるし
ませんでした。

とっくんは、しかたなく、外にある犬小屋の中で寝ること
になってしまいました。真夜中になり、犬小屋で寝ていると
とっくんを家の中に入れてくれるのは、熱を出してふらふらにな
っているお母さんでした。

「お父さんが寝たから、こっそり中に入りなさい。」

そんなやさしいお母さんなのに、まだとっくんは、

「ハンバーグをつくってくれないなんて、ひどいよ。」

と、まだお母さんにひどいことを言い続けます。ふとんの中
に入ってから、

「明日は雨がふって、遠足が中止になってしまえばいいんだ。」

と、ぶつぶつ言いながらねおりました。

次の日は晴れていました。とっくんはハンバーグが入って
いないお弁当を持ち、学校に行きました。よしこさんの愛の
ハンバーグを食べることができない最悪の遠足です。

でも、それを助けてくれる人が、とっくんの友達にはいた
のです。いざって時にたよりになるあの友達が、とっくんを
助けてくれるのです。 つづく

次回予告

救世主(きゅうせいしゅ)